

# ペーター・レーゼ ドイツ・ロマン派 ピアノ音楽の諸相2013



## リサイタル 情熱と憧憬

今やレーゼは、紀尾井ホールに  
なくてはならない音楽シーンとなっ  
ている。2005年のドレスデン音  
楽祭における紀尾井シンフォニーエ  
タ東京との共演によるベートーヴェ  
ンのピアノ協奏曲全曲演奏会は一  
つのレジェンドとなっている。そし  
て2008年9月、10月から4年  
がかりで行われたベートーヴェンの  
ピアノ・ソナタ全曲演奏会は初回の

《テンペスト》とりわけ《ハンマー  
クラヴィーア》がただちに聴衆の  
心を驚つかみにし、一夜にして巨匠  
ピアニスト、レーゼルの存在を確実  
にした。《ドイツ・ロマン派ピアノ音  
楽の諸相》とは、言い換えればベー  
トーヴェン・コンテンポラリーであ  
りポスト・ベートーヴェンでもある。  
19世紀ドイツ・オーストリア(全  
ヨーロッパでもあるのだが)の作曲

家で直接的に、あるいは間接的に  
ベートーヴェン音楽の影響を受けな  
かったものはいない。  
今回取り上げる4人の作曲家の  
うち3人は同じ時代の空気を吸っ  
ている。1827年に没したベー  
トーヴェンと同時代を生きたウェー  
バー(1826年没「舞踏への勧  
誘」、シューベルト(1828年没  
「楽興の時」とは少なからず交流  
もあった。シューマン(1810年生  
まれ「ソナタ第一番」も少年時代  
に次々現れるベートーヴェンの新作

2年目を迎える本シリーズ。ライプツィヒ弦楽四重奏団と、コントラバスの  
河原泰則との「ます」は名演になるのは必至。また、レーゼル自ら「情熱と憧  
憬」と題したりサイタルに込められた思いに期待が膨らみます。いずれの公  
演も聴き逃せません。平野昭さんがこれまでの紀尾井ホールにおけるレーゼ  
ルの軌跡を振り返りつつ、今回の公演について寄せてくださいました。

新日鉄住金ソリューションズプレゼンツ

## 室内楽 シューベルトの「ます」

昨年からは始まったペーター・  
レーゼルによる新シリーズ、今回  
はシューベルトのピアノ五重奏曲  
《鱒》をメインにおいてメンデル  
スゾーンとシューマンの弦楽四重  
奏曲を取り上げる。昨年10月の  
シューマンのピアノ五重奏曲名演  
の響きはまだ記憶に鮮明だ。この  
プロジェクトの魅力の一つは毎回  
アンサンブルを変えることにもあ  
る。昨年は日本を代表するクアル  
テット・エクセルシオとの共演で  
あったが、今年はライプツィヒを  
拠点として国際的に演奏活動を展  
開しているライプツィヒ弦楽四重  
奏団の登場だ。これまで大きな公  
演に恵まれなかったが、彼等は特  
にハイドン、モーツァルト、そし

てライプツィヒゆかりのメンデル  
スゾーン作品の演奏で極めて高い  
評価を得ていることは広く知られ、  
昨年6月には東京藝術大学音楽堂  
が、今年5月には東京ドイツ文化  
会館が招聘しての演奏会があった。  
幸運にも来日情報を知っていた人  
たちだけが彼等の馥郁たる楽の音  
を享受することができた。レーゼ  
ルが絶大な信頼を置くライプツィ  
ヒ弦楽四重奏団によるライプツィ  
ヒゆかりの二人のロマン派作曲家  
の弦楽四重奏曲、そして、世界的  
な名コントラバス奏者にして紀尾  
井シンフォニーエッタ東京団友とし  
てお馴染みの河原泰則が加わって  
のシューベルトの《鱒》は聴きの  
がせない名演の予感がする。



に深い関心を寄せていた。唯一のポ  
スト・ベートーヴェン世代であるブ  
ラームス(1833年生まれ「2つ  
のラプソディ」)はシューマンによつて  
広く世に紹介されたのだが、彼が理  
想として追究したのはベートーヴェ  
ン音楽の精神であった。今回レーゼ  
ルがリサイタルで取り上げる作品は  
音楽の表情こそ異なるものの、個々  
の作品の内に秘められた情熱と憧  
憬はまさにドイツ・ロマン主義精神  
の本質なのである。

(平野 昭 慶應義塾大学教授)

ペーター・レーゼル  
ドイツ・ロマン派ピアノ音楽の諸相2013  
新日鉄住金ソリューションズ プレゼンツ  
室内楽 シューベルトのピアノ五重奏「ます」  
11.7 19:00  
リサイタル 情熱と憧憬  
11.9 15:00

2公演セット券 S:11,000円 A:8,000円  
上記セット券をご購入のお客さまには、紀尾井シンフォニーエッタ  
東京第92回定期演奏会(11月15日②または16日③のいずれか)  
の1席を500円引きにてご提供します。